

今やらねば

田中館愛橋の生涯

⑩



【航空編】

日本初飛行 空の歴史開く

日本の空の歴史が田中館愛橋から始まったことを知る人は意外に少ない。戦前までの日本の航空史を基に、「まるで金太郎アメのように、何処を切っても田中館博士が出てくるのです」と紹介したのは、元日本航空協会文科情報室の酒井正子先生だった。

日本人で初めて空を飛ばうと考えた人はよく二宮忠八だと言われているが、実際に飛行機と呼べる物を飛ばしてみせたのは、田中館と二人の若者であったこともほとんど知られていない。

田中館と航空との関わりは、1904（明治37）年に日露戦争が起こった時



1910年ごろのアンリ・ファルマン複葉機の前で記念写真に納まる陸海軍人と田中館愛橋（2列目中央の黒衣でひげの老人）（田中館愛橋記念科学館提供）

に始まる。軍は旅順の敵状把握のために気球を上げたが、さまざまな問題が起こり、田中館に相談する。「行ってみたら理屈に合わないことをやっていので忠告したらうまくいった。それから色々なことで私を呼びに来た」と田中館は述懐している。以後田中館は期待に応え続けた。

07（明治40）年、パリでの度量衡国際会議に出席した田中館は、空を飛ぶ飛行機を目の当たりにして、「これか

らは飛行機の時代だ」と痛感する。09（明治42）年8月、航空で諸外国に遅れぬよう、陸軍と海軍は危機感を持って「臨時軍用気球研究会」を結成。この会は、明治天皇勅令第207号の「臨時軍用気球研究会官制」の発令によって生まれた日本初の公的な航空機研究機関であった。時の明治政府や軍がいかに飛行機を重要視したかが伺える。

ところが、会は出来たものの「一体何をすれば良いのか見当も付かなかった。結局、田中館博士の意見に従って進めて行くことになった」と海軍の山屋他人は残している。

まずは外国から飛行機を買って飛んでみようと思ひ、田中館は飛行機の買い付けに欧州に向いた。各地の飛行場や飛行機工場の視察を重ね、日本に帰ってからは当時まだ珍しかった自転車で行く場場の適地を探しに走り回る。大学では気象や基礎研究の指導をするなど全てにわたり大活躍している。

日本初の飛行場を埼玉県所沢に決めたのも田中館だった。まさに田中館がいなければ日本の空は明けなかった。

10（明治43）年12月19日、東京代々木練兵場（現代々木公園）で徳川好敏工兵大尉が、ついに動力機で日本初飛行に成功した。この時田中館は車に乗って伴走。成功に大喜びだったという。飛行時間は4分、最高高度は70メートル。飛行距離は3千メートルだった。（中村誠二 田中館愛橋会事務局長）

【ミニコラム】 グライダーも成功

アジア初の快挙 臨時軍用気球研究会が創設された1909年、田中館愛橋は海軍の相原四郎とフランス人武官ル・プリールに協力し、一緒にグライダーを制作して技術的な指導もしている。3人の私費でつくられ、竹と布でできた飛行機は50円だったという。同年12月9日に3人は、東京上野不忍池畔でプリールの乗ったグライダーを車に引かせた。機体は見事に空に舞った。アジア初の快挙であった。

※なおこのグライダーの復元機は、実際に空を飛びました。実物が青森県立三沢航空科学館に展示されています。